

「御用留」の性格と内容 (三)

——武州荏原郡上野毛村「御用留」の検討——

森 安 彦

目 次

はじめに —— 史料論の一視点 ——

一 「御用留」の機能と成立

二 上野毛村「田中家文書」と「御用留」

三 享保五年～寛政六年「御用留」の検討

四 寛政七年～文化四年「御用留」の検討

五 文化四年～文政四年「御用留」の検討

(以上一九号)

六 文政四年～文政一三年「御用留」の検討

(以上二二号)

七 文政一三年～天保一二年「御用留」の検討

(一) 「御用留」の存在状況

(二) 天保期の農民夫役

(三) 天保飢饉と領主の対応

(四) 天保期村落社会の変動

(五) 消費生活の増大と風俗統制

(以上本号、未完)

七 文政一三年～天保一二年「御用留」の検討

(一) 「御用留」の存在状況

本章では、武州荏原郡上野毛村名主田中家文書の「御用留」のうち、主として文政一三年（一八三〇）から天保一二年（一八四一）までの一一年間の「御用状留記」「御用留并日記」「御用留日記」「諸事御用留四」の各種の名称をもった一冊を検討対象としたものである。¹⁾

この一冊の「御用留」の表題年月、表題、収載年月、収録項目数等を一覧表にしたものが第1表である。

これによると、一「諸事御用留記四」と他の二～一「御用状留記」とは、すでに前稿でも指摘したように、その性格・内容が異なるものである。すなわち、一「諸事御用留記四」の内容は、文政一三年（一八三〇）三月から天保一五年（一八四四）九月迄の一五年間分が一冊に収録されており、その内容も「御用状留記」のような毎年の恒例的な行事や事項は含まれず、争論（出入）、村方騒動、年貢減免等の「事件簿」的性格を有するものである。これに対して、二～一「御用状留記」は、領主井伊家関係の日々の具体的な夫役徴発の状況を記録し、また幕府関係の鷹場や玉川筋への将軍「御成」、用水普請に関する役人廻村の記載等がみられる。それ故「諸事御用留記」と「御用状留記」の両方を統一的に把握することにより、村落動向の全体像が明確となってくるのである。なお「御用状留記」の中でも、六「御用留并日記」、七「御用留日記」は表題のとおり、日記風な記述や個人の見解などの記載がみられ興味をひく。一事例を紹介すると、天保三年八月二七日の項に、明二八日に内府様が玉川筋へ「御成」になるので、先乗りとして、「御目付様方方御出役」高崎助四郎がやってきた。「然ル処右助四郎殿義悪物^(考)三而越度見咎メゆたふり

可申而巳心懸罷在候様子ニ候」ときめつけ、「悪物ニ付取扱にくき僕也」と述べている（「諸事御用留記四」二二項）。支配役人にきびしい批判の眼をむけているのである。

なお、天保九年（一八三八）の一年分と同一〇年（一八三九）の一月から八月までの分が欠損しているが、これは後述のようにこの期間、名主が退役させられ、年寄役が名主役を代行したためである。同一〇年九月から名主が復帰すると再び「御用留」が名主家で作成されるのである。この欠損期間の「御用留」は年寄助七の手によって作成されたのであるが、この助七作成の「御用留」は未見である。

さて、ここでは、天保期（一八三〇～四三）の「御用留」の記載内容からみた村世界の動向をうかがってみよう。

第1表 文政13年～天保12年武州荏原郡上野毛村「御用留」

番号	表題年月	表 題	収載年月	収 録 項目数	備 考
1	文政13年～ 天保15年	諸事御用留記四	文政13年3月～ 天保15年9月	125	
2	天保2年正月	御用状留記	天保2年正月～ 天保2年12月	93	天保元年12月の1項目を含む
3	天保3年正月	御用状留記	天保3年正月～ 天保3年12月	94	天保2年11月の2項目を含む
4	天保4年正月	御用諸事留記	天保4年正月～ 天保4年12月	86	天保2年11月、天保3年4月・7月・12月の各1項を含む
5	天保5年正月	御用向留記	天保5年正月～ 天保5年12月	89	天保4年10月の1項目を含む
6	天保6年正月	御用留并日記	天保6年正月～ 天保6年12月	72	天保5年12月の1項目を含む
7	天保7年正月	御用留日記	天保7年正月～ 天保7年5月	35	天保7年6月以降欠損
8	天保8年正月	御用状留記	天保8年正月～ 天保8年12月	82	天保7年12月の4項目を含む
9	天保10年9月	御用状留記	天保10年9月～ 天保10年12月	26	天保9年の1年分、天保10年1月～8月まで欠損
10	天保11年正月	御用状留記	天保11年正月～ 天保11年12月	103	
11	天保12年正月	御用状留記	天保12年正月～ 天保12年12月	86	天保11年10月・12月の各1項目、同13年4月の1項目を含む

(二) 天保期の農民夫役

天保二年（一八三一）から同一二年（一八四二）の「御用留」のうち、記載が一部欠損している天保七年と同九年・一〇年の「御用留」を除き、夫役負担の動向を表示すると第2表のとおりである。天保期の全体的動向を指摘すると、前稿（二）の文政期（一八一八～二九）と比較すると夫役負担が半減していることである。これは天保期が連年凶作・飢饉が打ち続き農民疲弊が激しく、夫役負担に耐えられない状況にあったためといえよう。

この農民夫役の中心が領主井伊家の「供人足」、菩提寺「豪徳寺」に関するもの、「江戸屋敷」関係であることは、第2表で一目瞭然である。ここでは、主として、「江戸屋敷」夫役について簡単にみることにしよう。

天保二年一〇月一五日の代官所からの「触書」には次の一節がみられる（同年正月「御用状留記」七〇項）。

一 此度以御憐愍、已来御用詰人足老人ニ數物等別段ニ御手当被仰付、尚又板之間御入用之節、自然土間ニ被差置候節は、老人ニ數物忒枚ツ、当御かし被下置、又洗足盟人

第2表 天保2年～同12年上野毛村「御用留」からみた夫役負担の動向

区分 内容 年	領主井伊家関係										幕府関係						合 計				
	供人足			豪徳寺			江戸屋敷			その他			鷹 場		助郷		用 水		回数	人数	馬数
	回	人	馬	回	人	馬	回	人	馬	回	人	馬	回	人	馬	回	人	馬			
天保2年	7	29		19	64	6	10	35	3	2	10		5	8					43	146	9
天保3年	11	44		6	16	3	8	22					3	8					28	90	3
天保4年	7	27		9	31	5	11	30	5				1	2			1	1	29	91	10
天保5年	9	31		1	5		6	27		1	3		1	1					19	69	0
天保6年	4	17		6	19	2	6	18	3				1	4					17	58	5
天保8年	3	16		7	19	1	2	3					2	4			3	3	17	45	1
天保11年	4	18		5	24	2	6	1	9				4	6			1	1	20	50	11
天保12年	3	14		4	14	2	3	1	3				★5	16					15	45	5
合 計	48	196		57	192	21	52	137	23	3	13		22	49			5	5	188	594	44
1か年平均	6	24.5		7.1	24	2.6	6.5	17.1	2.9	0.4	1.6		2.8	6.1			0.6	0.6	23.5	74.2	5.5

(注) 天保7年と同10年の「御用留」は数か月分の記載なので省略した。

★天保12年の「鷹場」の欄の夫役は、将軍の「玉川筋御成」である。

(選)

(幕)

数高ニ応し御度被下置候間洗足致し、寒風之節はまぐうち廻し可為御休旨被 仰出候間、難有奉存大切ニ御奉公相勤候様一統へ申付可出候、早々相廻し留り可返候、以上

う十月十五日

御代官所印

これは江戸屋敷の「御用詰人足」に対してその処遇の改善事項を述べたものである。それによると、①人足たちが宿泊する場合、土間に寝る場合は、一人につき敷物(ござ)二枚を支給すること。②洗足盥を人数分用意するので、仕事でよれた足は洗うことができるようにすること。③寒風の節は、幕で囲み、直接風が当たらないで寝ることができるようにするということである。

以上のことは、これまでは、そのような待遇もなされず、人足たちは一日労働して、夜の宿泊では、泥足のまま、土間にござ一枚の上に寝かされ、寒風の吹きこむままであったということである。

事実、前稿(二)で紹介したように文政一〇年(一八二七)一月二五日の項には、このような劣悪な処遇に対し、「世田谷御領分村々惣代」として五か村の名主が連名して、代官所へ改善要求を提出しているのである。

その部分を提示してみると次のとおりである。

一御用多之節被召呼相詰罷有候人足之儀、御台所板之間ニ夜分ハ相休申候所ニ、去ル戌年十二月中も御餅春相始り候節御台所土間江御おろしニ付、銘々江御渡し被置候薄縁杓枚宛敷申候而立之儀ニ而伏り申事故、下タ冷仕、其上夜も明ケ通シ之大戸口方夜風吹込候得は、惣身冷渡り寒氣相凌兼熟睡等は曾以不相成、右ニ付夜明ケを相待旭影江罷出漸少々も相暖り候趣ニ而、既ニ代り合婦村之上も間々は相煩申候人足も有之、譬其節煩不申候共敲敷寒氣を請居候而ハ、次後為方ニ不宜農業稼之障りニも相成可申哉ニ奉存候、依之奉願上候、何卒格別之御慈悲之御賢慮を以、寒中之分ハ詰人足御赦免被成下置候様、是又奉願上候、

「御用留」の性格と内容(二三) (森)

〔世田谷区史料叢書〕第四卷二九九頁〕

これによって、「薄縁」一枚を支給されて土間で「立之俣」で「伏り申」という有様で、しかも、開け放しの大戸口からは夜風が吹込み、「惣身冷渡り」、寒さで眠ることもできず、夜明けをまって、「旭影」で身体を暖める始末で、病気になる人足もあり、苛酷な状況に放置されていた。それ故、「寒中之分ハ詰人足」をやめさせてほしいと歎願したのである。

この回答が四年後の天保二年に出されているのである。江戸屋敷の米捨人足などの、いわゆる「詰人足」がいかに非人間的に取り扱われてきたかが歴然とし、戦慄を禁じえない。

天保七年（一八三六）四月一九日には、世田谷村と弦巻村の両名主の連名で、「当春中々被仰付候米春詰人足之儀、追々農業繁多之時節ニ相成候付」として世田谷代官大場弥十郎の内意を得て「米春御免願」差出しの準備が進められている（『御用留日記』二九項）。この結末は確認できないが、村落側では「地代官」も農民側に立って、この「諸人足」の廃止要求を行なっているところが注目される。

また、江戸屋敷での夫役徴発に対して、成人男性は農作業に励み、子供たちを差出すという抵抗もとられた。

天保五年（一八三四）五月七日に、井伊家御賄方御普請作事方より世田谷代官所に宛て次の文書が出されている（『御用留日記』四七項）。

以書付得御意候、然は世田谷人足子供多参り御用立兼困り候間、人見立指越し候様被仰渡可被下候季節的にも五月という農繁期の時節であることも注目される。

天保四年（一八三三）正月「御用諸事留記」の五三項に、「人馬夫役の日当賃錢」の書上げ記載がある。表示すると第3表のとおりである。これによると、御上屋敷詰人足・御供人足・御上屋敷より豪徳寺へ参り人足・豪徳寺御作事

方手伝人足はいずれも一二四文であり、千田谷萱刈垣結人足は一八四文、桜田屋敷詰米つき人足は二四八文で最高となっている。馬の駄賃は、桜田上屋敷より豪徳寺へ御荷物付馬駄賃が二四八文、豪徳寺より桜田屋敷迄の御荷物附返し馬と八丁堀より桜田へ川岸上馬が同一駄賃の三七二文、品川・板橋御荷物付出し馬駄賃が五〇〇文となり最高額である。

しかし、これらの賃銀や駄賃を支給されても、これら人馬夫役が農民生活を圧迫し、農民を疲弊に追いやる原因の一つであることには変わりがない。

天保六年（一八三五）一二月には世田谷御領分村々惣代として三名の名主から代官所宛に「八丁堀御蔵屋敷炭薪附御用馬御免願書」を提出している（『諸事御用留記』五九項）。

その趣旨は、「極月ニ至候得は御百姓共一統江戸表江菜・大

根・薪等其外共品々持出し、売捌候右代料を以当暮埒合相済不申候^而は夫々差支申候」とあり、年末多忙の折柄、農民たちは、越年資金獲得のため、江戸表へ、菜・大根・薪等を馬の背に乗せて売出し、その資金によって正月を迎えるのである。その重要な時期に「御用馬」を命ぜられるのは大変苦痛でもあり、もし強行されるなら、「御用御差支にも相成可申哉」と、暗に「御用馬」提出の拒否をはめかしているのである。このため、領主井伊家側でも正月準備のための「御用馬」を大幅に削減せざるを得なかった。

第3表 天保4年人馬夫役の日当賃銭

人 馬 夫 役 内 容	賃 銭
御上屋敷詰人足	124文
御供人足	124文
千田谷萱刈垣結人足	184文
御上屋敷より豪徳寺へ参り人足	124文
豪徳寺御作事方手伝人足	124文
桜田より豪徳寺へ御荷物付馬駄賃	248文
桜田詰米つき人足	248文
豪徳寺より桜田迄御荷物附返し馬駄賃	372文
八丁堀より桜田へ川岸上馬駄賃	372文
品川・板橋御荷物付出し馬駄賃	500文

（出典）天保四年正月「御用諸事留記」53項

天保一一年の「御用状留記」一二月一七日の一〇三項には、「百八拾疋御免＝相成候」とあり、世田谷領ではこの日馬三〇疋、そのうち上野毛村では三疋を提供している事が記載されている。

このようにして、夫役徴発は農民らの抵抗により削減化の傾向をたどったのである。

(二) 天保飢饉と領主の対応

天保期を象徴するものに、凶作・飢饉・一揆があげられる。上野毛村の天保期「御用留」では、これらに對し、どのような記事がみられるだろうか。編年順にその動向をうかがってみよう。

天保四年（一八三三）九月、井伊家世田谷御領分村々名主共から代官大場弥十郎に宛て、凶作につき年貢減免願書が提出された（「諸事御用留記四」三六項）。

それによると、前年の天保三年一月中旬より数度の大雪があり、当四年三月下旬迄降り続き、寒氣酷しく、大麦・小麦共不作で例年の半分位いの收穫しかなく、百姓一同困り果てている。ところが当秋作も、春以来の天候不順で、夏氣土用中七月中迄も少しも暑くならず、冷氣のみで田畑とも收穫が期待できない。すなわち四月中旬以後これ迄も長雨が続き、稲作は潰滅的打撃をうけ「無毛同様之場所悉出来仕候」、その上畑作も前述のような麦作が不作で、秋作のうち、岡穂・粟・黍・小豆・胡麻・苡豆・瓜・茄子・木綿・蕎麦等に至るまで全部「不熟」で、中心でも「既＝粟・黍・木綿之類は種失＝相成候程之義＝付」、種も確保できない状態と「当惑至極仕、挙而愁歎罷在候」という事態であった。そこで領主側に「夫々田畑共立毛 御見分」による検見を出願し、この天保四年の年貢は「御憐愍之御取箇」を仰せ付られるよう歎願したのである。事実井伊家世田谷領では、年貢が減免され、天保三年の六割一分九厘から、同四年では五割三厘となり、一割一分六厘の減額となっているのである。

この天保四年九月には、酒造制限令と江戸市中への白米売出し令の二つが「公儀御触書」として、その「触書」が世田谷代官所から各村へ順達された。それによると、前者では近年諸国違作の国柄が多く、米穀が払底しているの
で、酒造人たちは当天保四年の酒造高は三分一を減石するように命じている（天保四年正月「御用諸事留記」六二項）。
後者では、この頃江戸では米が払底し米価が高騰して、江戸の市中が難義しているので、農村で米を所持している者
は白米に春立、来年三月迄は問屋は勿論素人でも江戸で自由に販売してよいと述べている（同六七項）。これは江戸市
中への米の売捌奨励である。

さらに天保四年一二月には、米価高騰による米商人への打ちこわし、不穩情勢について関東取締出役に対して、武
蔵国荏原郡・多摩郡の村々の村役人は、次のような請書を提出している。

当年（天保四年）は冷害で稲作が「違作」のため米穀高値となり、農業以外で生計をたてている者は困窮し、「無宿
無頼之遊民」は一層切迫し、米穀高値で販売している商人に対しては「打毀し候杯不法浪藉之張札」をしている。す
でに日光道中幸手宿では「打毀し騒動」が発生している。「米穀メ買メ売候者」は幕府・領主役人へ出訴し、「悪者共
徒党企候共決而荷担不致」、打毀し首謀者や張札等する者がいたら内密に訴せよと述べている（同七七項）。これに
よって米価高騰により穀商人への打ちこわしが拡大することを抑圧しようとしていることが判明する。

幕府は天保五年（一八三四）に次のような「公儀御触書」を関東一円に布達している。

「去巳年陸奥・出羽稀之違作^ニ而江戸廻米無之」として、関東筋国々では村役人等は米麦雜穀の保有量を村町単位
で調査し、当年の「新穀」までの食糧を残し、其外の余分は持主が「最寄市場町^ニ売捌、又は江戸廻致シ地廻米問屋
并脇店米屋共^ニ売捌」くよう督励している。また「身元相応之もの共、銘々心得を以窮民を救候ため、米麦雜穀困置
候者」については、その名前、石数等を代官・領主・地頭へ報告せよとしている（天保五年正月「御用向留記」三〇項）。

天保五年四月には世田谷御領分村々名主一同より、代官所に対して、夫食の「御救助」を出願している。

それによると、天保三年冬中より同四年春中に至る迄数度の大雪が降り続き、麦作の生育に影響を与え、夏の麦作の収穫が激減し百姓一同困窮し、その上冷気が続き、大風雨等により田畑共違作で、とくに晩稲は皆無である。全体に毎年半分の収穫も期待できない状況である。このままでは「実_ニ渴命_ニも及可申程_ニ必至と難渋至極仕罷在候」として、「何卒新穀出来申候迄露命取統罷在候様_ニ御救助被成下置候様_ニ一同奉願上候」としている（同四六項）。実際どのような救済が与えられたかは未確認だが、江戸周辺の世田谷領も深刻な情況にあったことが窺える。

天保五年五月九日には、「公儀御触書」として、前年の天保四年九月の江戸への白米積送り素人迄も勝手次第売捌を天保五年三月までと制限を切っていたが、米価高値が続いているので同五年十月迄延長する旨が示達されている（同四八項）。同年五月には「公儀御触書」として酒造高三分二相減しの触書が出されている（同五一項）。

天保七年（一八三六）八月には、各村単位に関東取締出役に対し、次のような文意の請書を提出している。

当申（天保七）年は夏より雨天で冷気が続いているが、「麦作は十分之収納、田方之義も此節_ニ照統候上皆無と申_ニは無之」、「夫食_ニ差支候程之年柄_ニ無之處」という認識を示し、しかし「米麦直段追々引上ケ貧民取統兼人氣不隠趣」がみられると指摘している。これは、去る天保四年の不作以来、「米穀困持候人氣押移、中_ニは利欲拘余業之者も穀商相始羅買等いたし、尚米価可引上見込を以困持候族も有之」として、利欲のため米穀を困持ち、そのために米穀等の高値が解消しないと述べている。そのため次の条項を申渡している。

- ① 米穀については、それを商売にしている者以外の者の買入れは差留る。
- ② 貧民救済のため米穀を買入れた者は、その石数、その米麦の内訳など正直に書出し提出すること。
- ③ 利欲のために買入れた者は「貧民疑惑之基」になるから家族の食糧分を除いて「売米」せよ。

④利欲のため買占め、隠置く分は見分してその処置を申渡す。

⑤在々河岸の間屋は蔵入米等の預け主・住所・その米穀分量を書上げるべきこと。

⑥酒造減石を命じているが、最近は勝手に濁酒を密造しているが禁止する。

⑦当節貧民の救済を行なう寄特者がいたらよく調査して報告せよ。

⑧普段衣食住に奢り、農業を怠る者は、凶作になると困窮し、ついには不法・狼藉に及ぶようになるので、村役人は日頃精々勸農に心掛けるよう教諭し、村内に遊民無頼者は勿論、田畑不耕者がいないよう面倒をよくみることに。

⑨万一、悪者共が「徒党」を企てても、決して参加せず、もしそのような企者の名前がわかったら村役人は勿論、

小前末々の者でも、早速其の筋へ通報せよ（『諸事御用留記四』七一項）。

これによって、米価高騰が単なる凶作だけによるものではなく、この不凶に便乗して、米穀を独占して市場価格をつり上げて暴利をむさぼる者に原因があり、そのため、一揆や打ちこわしが発生することを危惧していることがわかる。

天保七年一二月には「公儀御触書」として米価高値につき「輕者共御救之ため、此度江戸表多分之錢御買上ニ相成、相場格別ニ引上ケ候」とあり、錢を買上げ、錢相場を引き上げること、相対的に米価高値を薄めようという政策をとっている（天保八年正月「御用状留記」五項）。

天保八年二月十日、世田谷領代官大場隼之助・吉田祐右衛門の二名は領内二〇か村に対し、身元相應の者が極貧窮者扶助の奨励の廻状を出している（同一〇項）。

同年四月二日世田谷領代官所では「村々々願出候窮民共御救之義願之通り被下置候、明三日村々役人三判持参上町へ相揃可罷出候」として窮民救済の手当を支給している。この天保八年二月一九日に大坂市内は「大塩平八郎の乱」

が発生しており、領主側にとっても危機感をもって対応していることがわかる。

天保八年九月には酒造高三分一造り令が出されている（同六〇項）。

同年一〇月五日には、「当春中村方^ニ而救出し名前・員数横帳^ニ認め、明早朝迄^ニ差出し可被申候^ニ」という触書が代官所から出されている（同六四項）。上野毛村には、この折作成された帳簿類が現存している⁽³⁾。

天保期はこのほか、同一五年（一八四四）が凶作の様相を示し、年貢減免願が出されている（「諸事御用留四」一二三項・一二五項）。

四 天保期村落社会の変動

天保期は凶作・飢饉や一揆に代表されるように幕末期の社会変動の出発点となった時期であり、さらに六年後の安政元年（一八五四）には日米和親条約の締結など鎖国制が崩壊し以後幕末の動乱期に突入するのである。

この天保期には村落内にも階層分化の激化とともに、さまざまな矛盾が露呈し、村方騒動をはじめ諸変動がみられる。ここでは「御用留」の記載の中から、(1)「家出」、(2)借金・年貢の未納、(3)名主役追放等を取りあげてその実態をうかがってみよう。

(1) 百姓重蔵の「家出」

上野毛村百姓重蔵は五人組頭を勤める家であったが、文化年中（一八〇四～一七）より借金が嵩み、とても百姓経営では生活できず、家や若干の土地は放置したまま江戸新橋辺の桶屋職人の弟子となり、ここ二〇年余桶屋職人として過してきた。しかし、本来の百姓としての家を相続せず、領主側からは、再度にわたり「跡式相続」するよういわれたが、実現しないままにきた。ついに天保二年（一八三一）四月二五日に重蔵と五人組一同が呼び出され、「家相続

之儀は勿論門並村役等其外共諸事少も無恙候様」この四月から勤めるよう厳命された（「諸事御用留記四」八項）。しかし、莫大な借金を抱えた重蔵が命令一つで普通の百姓並みの生活に戻ることが不可能であることは五人組合の百姓が一番よく承知していた。そこで、結局重蔵負担分は残りの四人の五人組合で負担するより方法はなかった。しかし、これ以上組合仲間に負担をかける苦しさからか、五月に入ると重蔵の姿は村から消えてしまい、その行方は知れなかった。やむなく同年七月一七日に御役所へ重蔵「家出之御訴」を提出したのである（同一〇項）。天保六年（一八三五）二月一三日には「永尋」の重蔵の行方は不明であると届書が代官所に出されている（同五二項）。それから五年後の天保七年（一八三六）三月に重蔵は「尋出」され、村へ「召連」られてきた「届書」が名主から代官所へ提出された。代官所からは「相憚罷在候様」との指示が出されている（同六五項）。おそらく重蔵は村へ舞戻ってきたのであろう。重蔵の「家出」は借財返済の手段として一時的に他出し賃労働稼ぎをしてきたものと推定される。その後も重蔵家は存続しているので、帰住が許可されたといえよう。

このほか、この時期の「家出人」としては帳外者幸次郎が天保二年（一八三一）に「帰住願」を提出するが、却下され、村方への立入りを厳禁されている（「諸事御用留記四」九項）。また天保四年（一八三三）三月一四日には百姓平五郎の「家出届書」（同二六項）が出され、同六年（一八三五）二月一三日には「家出永尋人平五郎見当らざる届書」が出されている（同五二項）。それが天保十一年（一八四〇）三月に「探し出」された届書がみられる（同八五項）。

「家出」はしたが、最後は故郷の村に戻ってきたのである。

（2）百姓孫右衛門の借金・年貢の未納

百姓孫右衛門は「此度法外之所業^而」我意相募候無法之始末不埒至極ニ付、以来同人身分取計方村内一統互左之通り申渡事」とあり、天保六年（一八三五）二月十一日よりとして五か条の項目が列挙されている。一体「法外之所業」

「無法之始末」とは具体的にどのような内容をいつているのであろうか。孫右衛門の身分の取計を決めた条項をみてみよう。

①今までの五人組から除外し、村中二四軒組に加える。

②御用人馬や郷用向等はこれまで同様勤務する。

③金銭貸借、諸道具貸借、田畑入小作等の禁止。また年頭・五節句・年尾の祝義のやりとりも今後は無用である。

④仏事等の諸道具類の破損修覆金の徴収や念仏講の掛金等から除外すること。

⑤不幸等が生じた場合はこれまでどうりのつきあいとする。

以上の箇条を厳守し、もし守らないものに対しては、「是又孫右衛門同様始末方」を適用するとしている。孫右衛門に対して、このような措置をとる理由として、「畢竟我等方々貸遺置金子返済相滞候より事起候」として、このほか「寺修覆金年賦済方其外無尽会懸金迄も向々相滞候不法之所業」のためと述べている（「諸事御用留記四」五一項）。借金返済ができないため「村八分」とされているのである。

同日の「御用留井日記」にも次のようなほぼ同趣旨の記載がみられる。

一十一日少々曇ル、朝孫右衛門組合外権右衛門并組頭不残呼候而、孫右衛門不屈之始末有之候付、村方突合不相成候段相断、尚又村方一統^五は組頭中^五組合一統^五年頭・御節句・年暮祝義出入其外金銭借貸は勿論、万事決^而無用、念仏講・日待之義も同人方へは村中見舞遣候而同人方^五村中^五見舞候義無用之旨申断、且香典・懸銭も取遣り致間敷、村中廻り定使之義も急度取放申候事、其外道造り・けら・海老弦虫触当之義も代取立^ニ取計可申事」（天保六年正月「御用留井日記」八項）。

これによって、「村方突合不相成」といって「村八分」の対象となっているが、「道造り、けら・海老弦虫」の負担

は分担することとなっていた。

天保六年の年貢もついに未納となり、同七年正月二五日に名主幾太郎は村内四人の五人組頭を呼び出して次の条項を申渡している。

①孫右衛門の持地を残らず村持として引きあげてしまう。鎮守修覆金の返済は、孫右衛門の没収した土地からの収入をもって組頭四人より一年に四度ずつ提出する。但し一度につき金一分二朱とする。

②天保六年の不納年貢永や役入目銭の徴収は「実父諏訪河原村親父ヲ以上納ニ遣候処、御受取無御座候ニ付其償ニ不納仕置候」とし、他村の実父の肩替り納入は認められなかった。

③孫右衛門所持の土地を処分して年貢上納に充てることは、すでに持地も少高で引足らず、その上、鎮守修覆講返済高に引きあげ処分をきめているので、不可能であり、その他の土地は名主である自分の地所となっており無理である（天保七年正月「御用留日記」三項）。

これによると、名主幾太郎は貸金の抵当として孫右衛門の土地をすでに自分名義に変更しており残りの若干の土地を処分して鎮守修覆講の資金に充当しようとしたことが判明する。なお未年貢は他村にいる実父に肩替わりさせようとしたが、領主側が筋違いであるとして受領しなかった経緯もわかる。

この件に関しては、同日の「諸事御用留記四」六二項にも記載がある。

すなわち孫右衛門は「今般御札筋ニ付、右御調中同人義私共方へ御預ケ被成」として、親類吉五郎方へ預けられたのである。翌二六日には名主幾太郎から代官所へ宛て「訴書」が出されている。それによると、「御百姓孫右衛門」は去る未年（天保六年）の御年貢永の上納は同年一月一三日限りと「申触」を知らせておいたが、この日がきても上納しないので、再度至急上納を「申達」したが、何の連絡もなく「不納」した。そこで自分（名主幾太郎）が「弁

納」したので、早く上納するよう「申渡」と「何分法外之趣意^而申募」り、依然として「不納罷在候始終」なので放置できず、ここに「御訴」しますので、孫右衛門を「召出」し、年貢を「上納」するよう訴えているのである。

これに対して、同年三月一五日に代官所から呼出しの「御差紙」到来し、孫右衛門ならびに親類吉五郎・組頭月番重右衛門・年寄助七等を召連れて出頭したところ、三月二〇日を限り上納を命ぜられ、尚また孫右衛門は「手鎖」の「御咎メ」を受け、「村預」けとなったのである。番人として昼二人、夜三人の都合一昼夜五人ずつが配置されたのである。

三月二〇日の期限に孫右衛門はやっと「上納」したので、「咎人」としての措置を解除してくれるよう願書を親類・組合・年寄・名主連名で代官所へ提出した（諸事御用留記四）六七項。その後の孫右衛門の動向は未詳である。

(3) 名主幾太郎の退役と帰役

天保八年（一八三七）二月五日世田谷代官巻嶋南平より上野毛村名主幾太郎は翌六日に世田谷村名主安次郎宅へ出頭するよう命ぜられた。

そこで幾太郎は指示どおりに出頭すると、同宅には井伊家江戸屋敷の御賄役様・御目付役様・御代官巻嶋南平様が列座の上で幾太郎の「名主役御取上ケ戸メ被仰付」られた。

そこで幾太郎は「帰宅相慎罷在候処」、六日後の一日、江戸上屋敷御勘定所において、御賄広瀬昇様・御元方御勘定奉行荒木儀平様・御目付役様ならびに御代官御中屋敷巻嶋南平様が列座して、「戸メ御免被仰渡」れた。「尤名主役之義は退役之通相守り罷在候事」とされた。すなわち「戸メ」は解除されたが名主役は罷免されたのである。どのような理由でこのような処罰を受けたのかは明示されていない。退役見舞として「村方^并他村越石之もの共其外共早速参り呉候名前深切之義ニ付爰ニ覚置候事」として見舞の日付と名前を列挙している。中には「村内^ニ而無拋義理一通

りニ参り候様子ニ相見候」とか、「村八分」の制裁を加えた「孫右衛門三人之義は更ニ顔出いたし呉不申、悦居呉候哉、右三人之もの共義は自分義も本懐ニ相叶候ものニ付、爰ニ別段心底之処一入忝存候而留置申処也」と屈折した心境をのぞかせている。

これら見舞人の中で「誠ニ深切ヲ以参り被呉候衆中」をさらに特記して書出している。村内外の複雑な動向を示唆しているといえよう。

天保一〇年（一八三九）二月九日幾太郎は井伊家江戸上屋敷の代官吉田祐右衛門の「御長屋^五年始御祝義旁御機謙伺ニ罷出」ると、吉田から名主役に「帰役」（復帰）させる「含有之間」、「名前幾太郎義改名いたし可然」といわれる。そこで幾太郎は名主家の代々の通称である「七左衛門」と改名した。

同年九月一二日に「名主帰役」を命ぜられた（諸事御用留記四「八三項」）。

それ故、名主田中家文書の「御用留」は、幾太郎が名主役退役期間中の天保九年と同一〇年八月までの間は欠損しており、その期間は名主役を代行した年寄役助七方で作成し所持していた。そのことは天保一〇年九月「御用状留記」の冒頭の表紙裏に次のように記述されている。

天保九戌・同十亥右式ヶ年分御用留記下役助七方ニ有之、尤式ヶ年之内亥年分八九月も此方ニ有之、年寄助七方

ニ而天保八酉十二月も同十亥八月迄名主代勤役中也」

この名主幾太郎の一年八か月に及ぶ名主役取放ちの処分の原因は、これらの「御用留」からは不明であるが、いわゆる「村方騒動」等村内に基因しているとも思えず、対領主関係に原因が予測されるが具体的な内容は現段階では未詳である。

(四) 消費生活の増大と風俗統制

化政期（一八〇四～二九）から天保期（一八三〇～四三）にかけて、村落農民の生活は多様化した。一口でいえば消費面が増大したことである。すなわち、これまでの農民生活の中心は生産面を重視することであり、生産物の大半は年貢として領主側に収奪され、農民の消費面は儉約令に示されたように極度に切り詰められてきた。それが、化政期以降農民の抵抗により領主の年貢収奪は一定限度に固定化され、生産力の上昇にともなう生産物は農民生活の消費面に投入された。このことは、領主側からみると農民生活の奢侈化とうつり、許すべからざることであったが、農民側からみると生活の多様化であり冠婚葬祭が盛大となり、余裕と遊びが生活の一部にとり入れられ、生活に弾みがついてきたのである。凶作・飢饉に襲われ、必ずしも順調に展開したわけではないが、化政文化を生み出すもう一つの側面をみてみよう。

井伊家世田谷領代官大場弥十郎は天保四年（一八三三）四月九日、「寛政之初より天保三辰年迄之内」すなわち自分の代官在職中に①土蔵の新規建立、②居宅の建替、寺院の建替、③潰株名跡相統取立新家作、④次男・三男の新別家等を調査した（天保四年正月「御用諸事留記」一七項）。その結果、上野毛村では居宅建替の者は幾太郎が文化一〇年（一八二三）に、市郎右衛門が同一四年（一八一七）に、次右衛門が文政六年（一八二三）にそれぞれ再建し、潰株再興は紋右衛門が文政十一年（一八二八）に、新家作は亀次郎が文政四年（一八二二）に、寺院では覚願寺が天保三年に本堂建替を実施したと報告した（「諸事御用留記四」二九項）。

弥十郎は世田谷領二〇か村の代官在職中の成果として、「自然賛」に、石橋の架設一〇か所、土蔵の新築五二棟（それ以前は、わずか一〇棟、潰株再興による新家作七七軒、寺院の建替一二軒と記し、寛政から文化文政期にかけて世田谷領内も大きく飛躍したと捉えた。⁽⁴⁾これらの事柄は化政期の農民生活の上昇を象徴的に示したものといえよう。

天保二年（一八三二）四月「公儀御触書」として、近来百姓や町人が身分不相応な大規模な葬式を営み、墓所へ壮大な石碑を建立し、「院号居士号」等をつけているが、「如何之事」候。これからは葬式は、たとえ裕福あるいは由緒の家柄であっても、僧侶を二〇人以上集めて執行してはならない。施物も身分に応じて寄付し、「墓碑之儀も高サ台共四尺を限り、戒名^江院号居士号等決^而附申間敷候」と命じている（天保二年正月「御用状留記」二七項）。

天保六年（一八三五）正月二五日の項に「子供六人天神講備イわり呼振舞候事」（同年正月「御用留并日記」六項）とあり、子供たちの文字習得の場である「天神講」が存在していたことが判明する。

同年三月には関東取締出役より、組合村単位に、関東の村々を巡行している瞽女・座頭たちが、最近「過分之義祝儀施物ねたり取」っていると聞が、このような者は「早々召捕り」り差出すように命じている。

天保十一年（一八四〇）一〇月六日「諸事御用留記四」八七項には鎮守祭祀がこれまでにない方法で挙行されたことが記されている。すなわち、一つは「夜祭等は迄無之新規之義有之」として「宵祭いたし棧敷等掛候」とした前夜祭が催されたことであり、もう一つは「神楽之義例年と違別段夜深迄神楽師共釣留置為舞候」として深夜神楽を開催し、「村限り^ニ而は行届兼候故」隣村の「下野毛村之もの共一同いたし相頼為舞候」として、これらの村祭りに背を向けていた名主は「下野毛村之もの共加勢^ニ相頼神楽銭助合候義、一村恥辱外聞を尽候次第恥入事^ニ可有之哉」と記している。祭祀をめぐる、名主と村民とが反目し合っている姿をみることができる。

翌天保十二年（一八四一）名主は村内組頭への「申渡書」を作成した。それによると、「去文政十亥年以來関東向御取締御出役様方（中略）精々被為御渡候御趣意小前末々共一同難有承伏仕奉畏罷在候」として、「文政改革」の趣旨を想起させ、

一、例年之神事祭祀先々仕来之通聊無怠慢興行可致、勿論花美ケ間鋪義は決^而取計申間敷候事

神事祭礼の「花美」に歯止めをかけているのである。

このほか、「年始・五節句・年暮」等の祝儀も「進物等持参罷出候義以来皆止只空手^ニ罷出^ル」るように指示している。また「諸向願筋」は何事によらず、それぞれの所属している「組頭を以願出可申候」として、組頭を通さず直接名主に出願しても「決^テ取敢不申候事」とした（「諸事御用留記四」八八項）。名主による村落再把握の試みをみることができる。

さて、天保一四年（一八四三）四月には「御公儀厳重之御触書」として町村における贅沢な家屋の建築禁止・取り壊し法令が触れられている。

「なけし・杉戸附書院入側附等^ニ紛敷家作いたし、くしかた・ほりもの・床ふち・さん・かまちを塗金銀之から紙等相用、門玄関様之もの取建、或は外見質素^ニ而も却^テ工手間等相掛^ケ候茶席同様好事之普請も有之候趣相聞、奢侈僭上之儀不埒之至り候」として、「当六月を限質素之家作^ニ相改可申候」と命じている。「百姓家^ニ而余業も致候ものは勿論、農家一通り^ニ而も身分不相応之家作花麗・奢侈、又は身分不相応^ニは無之候共、物好之家作は自然耕作等怠慢之崩を生し、風俗頹敗之基^ニも相成候間、農家並之通^ニ家作相改可申候」として、「農事之隙明を考当十二月中迄引直可申候」と厳命している。

これをうけて、上野毛村名主七左連門は「長押其外共不残取調」べ家作の手入れを必要とする農民として、忠右衛門・次右衛門・庄左衛門・助七・紋右衛門・栄蔵・市郎右衛門・要二郎・平八・庄次郎・孫右衛門の十一名を列挙している。上野毛村二五軒のうちの十一軒であるから四四パーセントが質素に作り直しを必要としたのである。しかし実際は「前書之通り書上候得共、先ツ長押取放手入之義見合置」どうしても改作しなければならなくなるまでは放置するとしている（同一一六項）。いくら「公儀御触書」であっても実際は無視されているのである。

このほか、天保期の注目すべきこととして、養子縁組や女子縁組が「兎角持参金ニ専ら拘取組候義有之哉ニ相聞候」として、縁組が持参金目当でなされているとして、「此上左様成義於有之は敵數被遂御穿鑿急度御沙汰之品も可有之候」と示達している（天保二年正月「御用状留記」一四項）。このような風潮となれば貧しい農民の子弟の結婚はますます不可能となることからこのような触書を出したものと考えられる。

天保一二年三月には関東取締出役より各組合村寄場役人大惣代宛に次の触書が出されている（同二八項）。

近頃おかま踊又は稻荷踊杯と品々名目ヲ付、上州辺に在々立廻り大勢相集メ、一人正氣ヲ移シ候得共諸人悉ク右狂ニ乗調曲ニ随ひ踊出し、中ニは本心ニ不立還一命ニ拘り候者も有之哉ニ相聞候間、自然其筋正立廻り候共右様之踊見物は勿論、止宿逗留等決_ニ為致申間敷候

「おかま踊」「稻荷踊」が上州辺より流行し農村の中に浸透し、熱狂的陶酔的となり生命を失う者が出るという騒ぎがみられたことがわかる。天保一二年は、長い凶作・飢饉から脱出し、一度に解放感が噴出したものともいえよう。なこの時期には天保一三年（一八四二）三月から四月にかけて「組合・仲間・問屋」等の称禁止の触書等、いわゆる「天保改革」法令が書き留められているのである（『諸事御用留記四』八三項・九五項）。

これらの法令が農民生活を具体的にどのように拘束したのかは、まだ検討の余地があるといえよう。

注

(一) この一冊の「御用留」は『世田谷区史料叢書』第五卷

（東京都世田谷区教育委員会、一九九〇年三月発行）に収

録した。小稿は、その解説論文を骨子として増補改稿したものである。本叢書の編集を担当された世田谷区立郷土資料館、とくに区専門委員池上博之氏には種々お世話になり

深謝するものである。

(二) 拙著『幕藩制国家の基礎構造』二二八頁（吉川弘文館、一九八一年）

(三) 東京都世田谷区立郷土資料館編『旧荏原郡上野毛村名主田中家文書目録』一八頁（東京都世田谷区教育委員会、一

史料館研究紀要 第二号

九八二年発行

(4) 東京都世田谷区編『世田谷区史料』第五集一九九頁(同区、一九七四年発行)

